

## なるほど! 国際交渉

第14回 国連の気候変動に関する補助機関会合  
ボン会議(SB42&ADP2.9)の速報:  
パリへ向けて交渉テキスト案の整理進む

WWFジャパン 気候変動・エネルギープロジェクトリーダー 小西 雅子



## Q 今年は年末のCOP21で温暖化の新しい国際枠組みができるまで何があるの?

歴史的に温暖化に責任のある先進国と、途上国の間に、厳然たる差を設けていた京都議定書から、2020年以降にはすべての国を対象とした温暖化対策の国際枠組みがつけられることになっています。歴史的な合意がなされるのか、年末のパリで開催されるCOP21に向けて温暖化の話題が世界中で盛り上がってきました。2015年には4回、パリCOP21に向けた準備会合が予定されており、その第2回目の会合が、ドイツ・ボンにおいて、6月1日から11日まで開催されました。ここでは大きく分けて3つの焦点がありました。

- ①2020年以降の国際枠組み「パリ合意」の交渉テキスト案：進展が見られた
- ②2020年までの先進国の温暖化対策の国際評価：日本も登場
- ③2020年以降の削減目標について：世界の1/5の国が2020年以降の目標草案を提出、日本の2030年目標草案も政府原案公表

## Q パリ合意の交渉案の進展というのが、会議の成果と言えるの?

国際交渉とは、温暖化対策の約束事を法的文書で合意する、という作業です。合意されるべき文書の案が出て、それをベースに交渉が進んでいく、その形が整っていくことが「進展」と言えるのです。つまり、今回のボン会議の結果としては、合意文書の案が整っていく方向に決まったので、先に



ボン会議：新築されたばかりの新会議場は自然採光と太陽光発電の環境配慮!  
©WWFジャパン

希望を残した進展と言えるでしょう。

そもそも、2月にジュネーブで開催された第1回準備会合で、パリで合意される条約の下書きとなる「交渉テキスト」がまとめられたので、今回の第2回準備会合では、いかにパリに向けて、この交渉テキストを整理していけるかが焦点でした。結果として会議の最初には、90ページもあったテキストは、セクションごとに整理統合が進み、選択するべき争点が明瞭化する形に近づいてきました。

さらに、次に8月に開催される第3回準備会合に向けて、このボンテキストを整理して“総合的なパリ合意案”(パリ議定書になるのか、その他の名前になるのかはわかりませんが、便宜的に「パリ合意」と呼びます)を、まず共同議長がつくって、各国に交渉のベースとして示すことになったのです。

しかし各国の矛盾する意見をすべて反映した合意文書案をつくるというのは、非常に困難な仕事ですから、でき上がった共同議長案を見て「これは受け入れられない」とまた各国が紛糾することもあり得ます。予断を許しませんが、まずは合意が可能となる

ような希望は残したと言えるでしょう。

もちろん、先進国と途上国の取り組みにどのように差をつけるのか、パリ合意に書き込まれる削減目標にどの程度法的な強さを持たせるのか、などの難しい問題の交渉はまだこれからです。パリにおける年末のCOP21まで、残された準備会合はあと2回ですから、8月の第3回会合までに示される共同議長案をもとに各国もそれぞれ国内で討議を重ねて、次の会合における交渉をなるべく有意義なものにしていく必要があります。

### Q 日本の2020年目標と言えば、90年比25%削減から05年比3.8%削減に大幅に引き下げたけど、国際的な評価は？

この交渉でもう一つ重要なのが、2020年までの世界の温暖化の取り組みを底上げする話し合いです。その重要なプロセスとして、注目されているのが、各国の2020年目標の実施状況を国際的に評価するプロセスです。平たく言えば、各国がそれぞれの2020年目標に向かってどのような取り組みをやっているのかについて、お互いに質疑応答ができる、ということで、温暖化の国際交渉において、ありそうでなかったものです。各国がお互いに公開の場で質問し、その回答を世界各国で聞くという形は、進捗状況を監視することにもなるので、目標達成にも有効なプロセスと考えられています。

今回のボン会議にはオーストラリアやカナダ、日本、それにドイツやイギリスなどが登壇しました。特に、もともと1990年比25%削減を公表していたのに、2013年に2005年比3.8%削減に、目標を激減させた日本にも、たくさんの質問が寄せられました。「今の2020年目標は暫定目標ということだが、いつ確定目標を出すのか?」「非常に低い目標だが、確定目標の際には上げるのか?」といった厳しい質問に、日本は「原発の再稼働が未定である中、2020年のエネルギーミックスが決まらないので、まだ確定目標は出せない」といった頼りない回答を返し



CAN記者会見:日本の2030年目標において、再エネの目標値が低いことに記者の質問が集中。 ©WWFジャパン

ていました。

一方、再エネ先進国であるドイツなどには質問も「ドイツはよい範を示してくれてありがとう。その知恵を分けてほしいのだけど…」といった賛辞を込めた質問が相次いで、いろいろ批判はあっても世界の尊敬を集めていることを実感させられました。

### Q 日本の2030年目標がG7で発表されたそうだけど、国際的な評価は？

ボン会議の前に2020年の目標草案を出していた国は、アメリカや欧州連合(28カ国)など38の国と地域で、会期中にはモロッコとエチオピアが提出し、これで世界の1/5の国が提出しました。同じドイツで開催されたG7で、日本も2030年目標、2013年度比26%削減を発表しました。

しかしその内容が、欧米との比較で見かけ上有利に見える、排出量の多い2013年を基準年としたことや、再エネを抑制している目標であること、またCO<sub>2</sub>排出量の多い石炭火力を国内外で推進しようとしているといったことで、世界の市民社会からの非難が集中し、世界の気候変動に関する900団体のネットワークであるCANから、準備会合ではめったに出ない化石賞(交渉を最も妨げている国に贈られる不名誉な賞)を3つも単独受賞してしまいました。

この目標草案は、国内で6月3日から7月2日までパブリック・コメント(意見募集)にかけてられています。ボン会議における国際的な評価も鑑みて、みなさん、どしどし意見を出していきましょう!!